



発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号 345
電話 0480(34) 4111

華中工学院前院長

朱九思氏 本学を訪問

今後の交流について意見交換

華中工学院の朱九思前院長が、五十九年九月二十九日、初めて本学を訪れた。

これは、五十八年十月六日、学術交流に関する取り決めと研究協力覚書について調印するため、三浦学長が華中工学院を訪れたことに対する答礼という形で実現したもの。

朱氏は、当日午前十一時三十分ごろ、本学のあとに華中工学院と学術協定を結んだ広島大学の国際主幹・江上芳郎氏といっしょに到着した。玄関では、三浦学長をはじめ、先にスポーツ交流団として華中工学院で親善試合をしてきたバレーボール部の学生や、大学関係者らが待ちうけ、歓迎のあいさつをした。

この後、朱氏は、本学図書館の閲覧室で、本学の教員を対象に「中国における高等教育の現状と改革」というテーマで、約三十分間にわたり、記念講演をした。

午後四時ごろ本学を去った。また、この日、今後の学術交流に関する具体的な交流について、より発展的な意見の交換が交わされ、いよいよ本格的な学術・スポーツ交流を促進していくことが確認された。

☆セネカ応用人文科学カレッジカナダのオンタリオ州ノースヨーク市に本部があるほか、モントリオール市などに十のキャンパスをもつ大学である。

最近、外国の教育機関からの研究協力の依頼が相次いできており、本学ではその内容の調査と検討を始めている。

海外からの研究協力依頼相次ぐ

☆セネカ応用人文科学カレッジカナダのオンタリオ州ノースヨーク市に本部があるほか、モントリオール市などに十のキャンパスをもつ大学である。

最近、外国の教育機関からの研究協力の依頼が相次いできており、本学ではその内容の調査と検討を始めている。

人事

▽退職 中村光子(7・31付)井上隆子(1・31付)▽任用 (8・1付)南山芳文(みなみやま・よしふみ)教育技術員・電気実験センタ―

▽新任 (10・1付)機械工学科主任教授 渡辺寛(わたなべ・ひろし)



この新実験・研究棟には、電気実験センタ―と材料試験センタ―が入ることになっている。

また、超高電圧試験研究設備の導入にともない、これを収納する実験棟の建設が進行中である。建物面積一、二二二平方メートル、高さ二十一メートルの実験棟が年度内に完成する。

一方、学生の課外活動のための合宿棟が、学内に建設される計画があり、現在設計作業に取り組んでいる。

新実験・研究棟が完成

合宿棟も着工予定

五十九年度施設計画にあった新実験・研究棟が八月末に完成した。鉄筋造、地上三階建て、延べ面積が、九九五平方メートルである。付帯設備として、エレ

一号館の約三分の一弱の大きさである。付帯設備として、エレ

特別奨学生・7人合格

昭和六十年度の特別奨学生が決定した。前年度に比べて応募者は少なかったが、厳しい審査の結果、機械工学科一人、電気工学科二人、建築学科四人が合格した。合格者は次のとおり。

- ▽電気工学科 金澤 勝彦(狭山工・埼玉)
- ▽機械工学科 末武 稔也(新潟工・新潟)
- ▽建築学科 池田 憲史(大宮工・埼玉)
- 金井 敏光(高田工・新潟)
- 小林 隆之(新潟工・新潟)
- 権藤 繁雄(東京工・東京)

教務課から

三月八日、一階ロビーで、本年度の学業成績が発表されます。学生諸君は自分で、修得状況を確かめ、進級(卒業)条件を満たしているかどうかを、判断することになっています。

発表後、成績についての問い合わせは、当事者が教務課の窓口でなければなりません。学生はもろろんのこと、父兄からの電話での問い合わせにも応じません。

後援会からスプレーガン寄贈

石が一〇センチ、石灰ダスト、カラーライムサンドが五センチずつとなっている。

インフィールドは、下から、厚さ一〇センチの砕石、一二センチの赤土、〇・八センチの混合土で仕上げられている。コーナー部分には、砕石と赤土が一五センチずつ盛られ、最上層部には芝生が植えられる予定である。

今後の整備計画として、トラックの外周には、字溝を設ける部分と、両コーナーの部分に芝生を張るほか、メーンスタンドが建設される予定である。

従来、雨が降り続けると一週間も使用ができないうらい、水はけがきわめて悪かったグラウンドも、この改修工事によって、見違えるばかりに良くなった。

陸上競技場

改修工事終わる

本学の陸上競技場の改修工事が、五十九年七月十六日から九月三十日まで行われ、装いが新しくなった。

改修工事は、グラウンドを掘り起こし、暗きよの改修から始まった。四百メートルトラックの内周に暗きよの幹線めぐらし、インフィールドにその支線を施した。暗きよの幹線部分は、深さ三センチから四・六センチ、直径一五ミリのネトロンプイプを使い、回りを砕石で囲っている。支線部分は二・五センチの深さでほぼ同じ敷きをしている。

トラックは、四層からなっており、下から砕石、軽石、石灰ダスト、カラーライムサンドである。各層の厚さは、砕石・軽

石が一〇センチ、石灰ダスト、カラーライムサンドが五センチずつとなっている。

インフィールドは、下から、厚さ一〇センチの砕石、一二センチの赤土、〇・八センチの混合土で仕上げられている。コーナー部分には、砕石と赤土が一五センチずつ盛られ、最上層部には芝生が植えられる予定である。

今後の整備計画として、トラックの外周には、字溝を設ける部分と、両コーナーの部分に芝生を張るほか、メーンスタンドが建設される予定である。

従来、雨が降り続けると一週間も使用ができないうらい、水はけがきわめて悪かったグラウンドも、この改修工事によって、見違えるばかりに良くなった。

出迎えをうけた朱氏(写真中央)＝1階ロビーで



本学の陸上競技場の改修工事が、五十九年七月十六日から九月三十日まで行われ、装いが新しくなった。

改修工事は、グラウンドを掘り起こし、暗きよの改修から始まった。四百メートルトラックの内周に暗きよの幹線めぐらし、インフィールドにその支線を施した。暗きよの幹線部分は、深さ三センチから四・六センチ、直径一五ミリのネトロンプイプを使い、回りを砕石で囲っている。支線部分は二・五センチの深さでほぼ同じ敷きをしている。

トラックは、四層からなっており、下から砕石、軽石、石灰ダスト、カラーライムサンドである。各層の厚さは、砕石・軽

石が一〇センチ、石灰ダスト、カラーライムサンドが五センチずつとなっている。

インフィールドは、下から、厚さ一〇センチの砕石、一二センチの赤土、〇・八センチの混合土で仕上げられている。コーナー部分には、砕石と赤土が一五センチずつ盛られ、最上層部には芝生が植えられる予定である。

今後の整備計画として、トラックの外周には、字溝を設ける部分と、両コーナーの部分に芝生を張るほか、メーンスタンドが建設される予定である。

従来、雨が降り続けると一週間も使用ができないうらい、水はけがきわめて悪かったグラウンドも、この改修工事によって、見違えるばかりに良くなった。

発表後、成績についての問い合わせは、当事者が教務課の窓口でなければなりません。学生はもろろんのこと、父兄からの電話での問い合わせにも応じません。

発表後、成績についての問い合わせは、当事者が教務課の窓口でなければなりません。学生はもろろんのこと、父兄からの電話での問い合わせにも応じません。

システム工学科 定員増

60年度からシステム工学科の入学定員が120人となります。

59年度学内特別研究設備など

高額設備の購入決まる

五十九年度の文部省研究装置と学内特別研究設備がすでに決定している。文部省研究装置では、超高電圧試験研究設備とフォトルミネセンス法結晶解析装置が採用された。学内特別研究設備は、教員から提出される高額研究設備購入のための計画調書を審査して決められるもので、十二の設備の購入が決定した。ここでは二設備について紹介する。

フォトルミネセンス法
結晶解析装置

新材料の開発研究を行う場合に、得られた物質の評価を行うことはきわめて重要である。本学においても、半導体デバイス作製における最先端技術である分子線エプタキシー(MBE)法による、新しい半導体材料のガリウムヒ素を用いたデバイス開発や、現在注目を集めている光励起CVD法による、未来の材料のダイヤモンド薄膜

けい光X線分析装置

本装置は、データフレックスを装備している。CRTと対話方式でデータ処理ができ、操作が非常に簡単である。また、X線強度の増加と、分析試料面からの妨害X線が、測定に影響を与えない視野制限スリットになっている。したがって、分析精度が高く、微量成分試料は前処理の方法によらず、PPL法を用いて結晶を評価する必要不可欠のものであり、その占めるウエイトも大きい。フォトルミネセンスとは、物質(気体、液体、固体)が光の形でエネルギーを吸収し、その逆過程としてエネルギー放出を光放出の形で現象をいう。身近な例では蛍光灯がそれである。この時、出てきた光を分析するものがフォトルミネセンス法(以下PL法)である。PL法は非破壊で、しかも高感度なため、半導体の評価方法としても非常に有効な手段となっている。PL法を用いて結晶を評価する

研究室では

23

都市史・建築設計研究室

前後からの大雪を踏み分け、一時間かかる長命寺への石段を登ると、眼下に広がる琵琶湖は雪煙にみぎみぎと。雨に打たれながら苦労した浄瑠璃寺のスケッチの後の、温かい甘酒の味が忘れられない。冬の訪れと共に、三月に行う研究室最大の行事、自由科目「建築史実習」の準備が、三年生を中心に始まる。旅程を決め、宿を予約し、見学のためのパンフレットをつくる。建築を学ぶことの第一歩は本物に接し、その空間のもつ魅力を感じることである。建築史実習では、修学旅行のようにバスで巡る数多く見るようなことはない。山上の

加藤であれば麓から歩き、密教寺院を建てた人びとの心に少しでも触れようとする。カヌラのシャッターを押し安心して帰るようなことはない。一時間でも二時間でも腰をおろし、手を動かしてスケッチをする。宿へ帰ると、全員のスケッチを並べ品評会を開く。教員であらうと学生であらうと区別しない。奈良の山奥にある談山神社の十三重塔のスケッチでは、十二重塔や十四重塔が登場してしまった。旅行の一日目にはまるでスケッチにならなかった学生が三日目ごろには、それなりに描くようになってくるのが嬉しい。

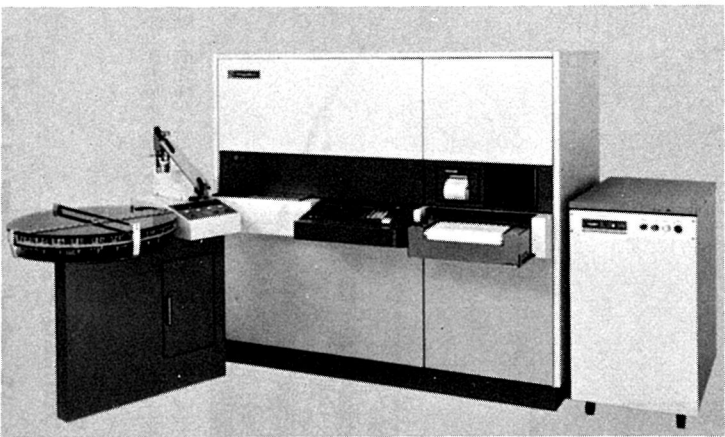
さて、研究室としての最大の研究テーマは「ネパール王国王宮の研究と保存対策」である。一九七八年の第一次調査から始まり、昨年の十一月には、大萱先生・黒津先生など七人のメンバーで第六次の現地調査を行った。ネパールの魅力は、簡単に言えば接点の文化にある。インドと中国チベットの接点、水気候と亜熱帯気候の接点、モンゴル系人種とアーリアン系人種の接点、木造建築とれんが造建築の接点。異なる二つの性格がぶつかりあい、葛藤し、独自の魅力ある文化を創りあげている。

この三月には、二冊目の調査報告書『The Royal Buildings and Buddhist Monasteries of Nepal (ネパールの王宮と仏教僧院)』を刊行する。海外学術調査で

59年度研究設備購入一覧

(一) 内は設置場所を示す

- 【文部省研究装置】
 - 超高電圧試験研究設備(新研究棟)
 - フォトルミネセンス法結晶解析装置(四一実験室)
- 【学内特別研究設備】
 - 内燃機関動力制御装置(M1棟)
 - 画像処理装置開発システム(M3棟)
 - 金属粉末を粘結材とする通気性セラミック型試験研究設備(M6棟)
 - 三〇〇トン油圧万能成形プレス(M10棟)
 - ダイヤモンド作成装置(E10棟)
- 【主な仕様】
 - ☆形式 Sys3080E
 - ☆X線発生部 60kV、80mA
 - ☆分光結晶 6
 - ☆データ処理システム データフレックス1501
 - ☆分析元素 C、U
 - ☆視野制限スリット 1Q、2Q、3Qmm(直径)



全自動蛍光X線分析装置 System 3080

国際交流のこと

三浦 鞞郎

私が中国を訪れたのは、昨年の秋であった。ちょうどモクセイの花の盛りで、華中工學院の校庭にも、甘い香りが満ち満ちていた。私がいま住んでいる町にも、モクセイの木がたくさんある。中国を訪れながら、私はわが町、わが家の庭を思い出していた。今年のモクセイはもうとうに散ってしまった。あれから一年以上たったわけである。そしてその一年の間に、日工大と華中工學院との間にはいろいろな行き来があった。あのとき向こうで結んできた学術交流の協定が着々と実を結んできたのである。

まず七月に、華中工學院の講師をしている劉正林先生と歐陽明德先生が一年の予定で来日した。劉さんは材料試験センターの吉村教授のもとでTQCの推進に関する研究を、歐陽さんは情報技術センターの石井教授のもとでマルチCPUによる制御技術の研究をしている。

お二人とも日本語が大層上手である。聞くところによると、中国では、日本に留学するためには日本語の国家試験に合格しなければならないのだそうである。お二人が帰られたあとには、また代わりの方が来られるが、その候補の方たちにも日本語の勉強中であるという。

劉、歐陽両先生は、研究のかたわら、教職員の中の希望者に中国語を教えてもらっている。二十数名聴講しているが、みな熱心である。これからは中国を訪れる人も増えるであろうから、むこうが日本語の勉強をしているなら、こちらは中国語を習って、簡単な会話はできるように、というのである。国際交流には、なによりもまず言葉が大切である。

八月には、バレーボール部が中国を親善訪問してきた。先方から招待されたのである。大変な歓迎を受けたよう、武漢の空港では、飛行機から降りたところに「日本工業大学排球部熱烈歓迎」の横断幕が張られていたという。試合の方は一勝一敗で、これまた親善の役割をみごとに果たしてくれた。

九月には、長谷川教授、廣瀬教授、鈴木(昭)助教授、丹羽講師が三週間、講義と指導のために訪中した。ロボット工学とマイコンシステムがその課題で、先生や大学院の学生が聴講した。あのように真剣な目つきで話を聞いてもらったのは初めてだ、と口々に言っておられたが、それだけに朝から晩までの講義と指導はさぞ大変だったであろう。

外国から講師を招聘すると、たいていはむずかしい講義と盛大なレセプションで終わってしまう。昨年、学術交流の協定に調印してきたとき、今後これがどう展開していくであろうかと、内心心配であった。お互いの観光を中心とした、形だけのものになってしまう、と思っていた。ところが先生方の話を伺うと、講義というよりは真剣な討議だったようで、言いづらくとも遠慮なく言ってきた、という話を聞いて、ほんとうに安心した。

劉、歐陽両先生は、からだを心配しなければならぬくらい研究に精励しているし、バレー部の学生は貴重な体験をしてきたし、先生方も多大の成果をあげて帰ってきた。朱院長先生からも懇切な礼状が届いた。私はいま、われわれの協定がほかのどの大学にも例を見ないような、りっぱな実を結ぶことを確信している。

もっともこの話は、東京大学に留学していた華中工學院の副教授、黄一夫さんと丹羽さんとの個人的なつながりから始まった。黄さんは本学を訪ねてきて、私も会った。だんだん熱心になって、もう帰国の時期が迫っていたが、それを延期して、仲介の労を取った。とうとう中国に来てくれということになった。未知の国の旅を思いながら、そして先行きの不安も隠せないまま、私は重い腰を上げた。つまりこの協定には、始めからなんの気負いもなかったのである。

ちかごろは国際交流がブームのようになっている。どこか海のむこうの大学と手をつながないと、バスに乗り遅れると考えているようなところもある。もちろんわれわれも、広く世界に目をやり、ときには手をさしのべたいと思う。しかし、それがけっしてお祭り騒ぎにならないよう、学術交流という土台の上をしっかり足をふまえていいたいと思う。

スポーツ交流第一陣

印象記

小林 勉

バレーボール部善戦 華中工学院で親善試合



華中工学院の校門で(写真上)
熱烈歓迎、をうけた武漢空港で(写真下)

私たちの訪中は、本学と華中工学院との間に、既報のように学術交流がとり交わされ、学術面のみならず、学生同士の交流を含めたものという試みの最初のものであった。

具体的には、本学のバレーボール部員が、華中工学院を訪問して親善試合を行う形がとられた。これに関しては、華中工学院からの極めて好意的な招請があったことは言うまでもない。

訪中に際し、学長先生はじめ自治会の皆さんから盛大な壮行会を開いていただいた。

私たちが、その招請を受けて成田空港を飛び立ったのは八月一日の午後であった。四時間ほどして、中国の第一の政治都市北京に到着した。私たち一行のメンバーを紹介すると、私と市川教務課長、体育研究室の中島先生、それにバレーボール部員十二名である。

壮大な自然溢れる中国に全員が初めて訪れたこともあって、皆の顔がいくぶん緊張しているように思われた。

私たちは北京で三泊した。万里の長城、頤和園などに観光に訪れている人々の群れ、そして天安門広場では夜景を楽しむ家族づれの人たちが、真夜中まであとをたたないには驚いた。

そして、次の目的地武漢空港に到着した。関係者の出迎えはまさに、「熱烈歓迎」の言葉どおりで、私たちの想像した以上のものであり、恐縮した。華中工学院は空港よりバスで四〇分くらいのところにあり、その広大なキャンパスは、中華人民共和国という国の大きさそのもののような広さであった。キャンパスの中には病院、郵便局、スーパーなどがあり、一つの町の

ような機能を果たしていた。

なつたらしい。「大松式バレー」は日本ではなく、中国で再び花開いたという事であろうか。国際舞台での中国選手の活躍は目をみはるものがある。

さて、試合であるが、両チームによるベントの交換と審判員の紹介のち始まった。結果は一勝一敗という成績で引き分けであった。暑さのせい、本学の学生一名が脱水症状で退くというハプニングがあったものの、両チームとも力いっぱい頑張ったし、応援する方もチームに關係なく、すばらしいプレーに拍手でこたえ、そのマナーのよさには感心した。それにしても慣れのせいだろうか、中国選手はそんなに汗もかかず、暑さに強い。そして、身長は本学の学生より平均で、一〇センチ以上高く、体型は細型で跳躍力はすばらしく、戦法は攻撃型ของทีมであった。うらやましい

ほどに全員が理想的な体つきをしている。

また、華中工学院の体育施設や運動器具は、体育系の大学でないせいだろうか、日本と比較しかなり遅れている。

たとえば、試合を行った体育館も、その広大なキャンパスに比べ小さく、本学の二分の一くらいであろうか。しかも、床はコンクリートであった。

ほかに、私の専門とする体操競技の平行棒などは鉄パイプの旧型であった。また、バスケットのバックボードは木の手づくりであった。

しかし、屋外に目を転ずれば体育館の近く二〇面以上のバスケットコートが見える。といったように、学生たちは充分スポーツを楽しむことができる環境にはあられる。その小さな体育館も近い将来建て替えるという話であった。こういうところ



バン格拉デシュからの便り

職業訓練校で溶接を指導

青年海外協力隊の小田桐氏

本学機械工学科の第一期生（昭和五十六年三月卒業）・小田桐久夫氏は、青年海外協力隊の一員として、昭和五十七年十月からバン格拉デシュへ派遣された。現在、同国のチッタゴンにある職業訓練校で、溶接科のインストラクターとして活躍している。

最近、本学に届いた小田桐氏の手紙を紹介しよう。

——バン格拉デシュ——

バン格拉デシュ国に来て、早三年目。ここののんびりムードにも慣れてしまい、現地人のような生活をしている今日この頃。

思い出すこと二年前。青年海外協力隊の試験を受け、自信のあった（？）英語も体当たりでどうにかパス。溶接の専門家として、バン格拉デシュの職業訓練校に配属になった。

この国は旧東パキスタンで、面積は北海道の約一・八倍。人口が約一億人。人種はインド人そっくりのベンガル人。文盲率七〇パーセント。そして、宗教は、妻を四人まで持てるイスラム教。

現地にきて、まず、困ったのは言葉。この国はベンガル語という現地語を使っている。言葉は気持ちで通じる。なんぞ言っていると、技術指導員は動かない。言葉が不自由なく使えるのに半年はかかる。

そして、食事。一日三食、全てカレー。一年中暑いこの国、目から火の出るようなカレーが食欲をそそり、気が付くと平らけている。

るにも、中国の息吹が感じられる。た。

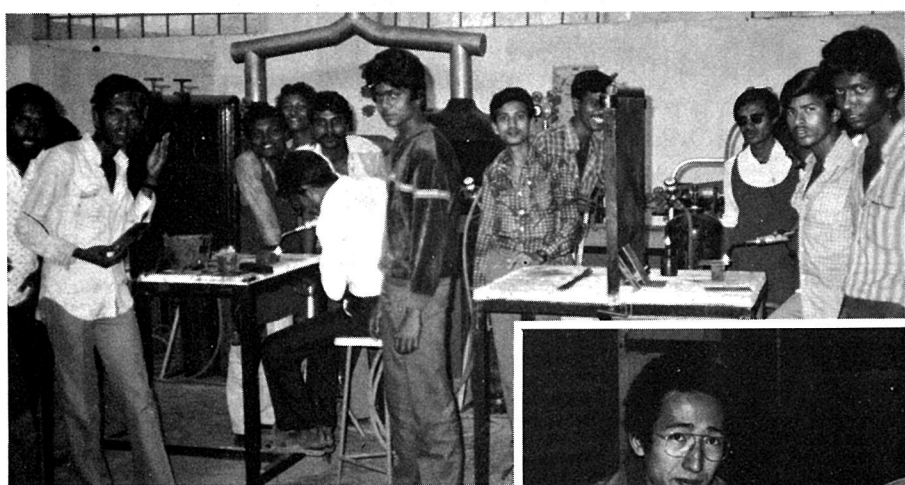
私たちは、この武漢から八月八日に上海へ向かった。

上海は中国最大の商業都市だけに、人々は活気にあふれ、服装なども意外と解放的に感じられた。当地で二泊した私たちは

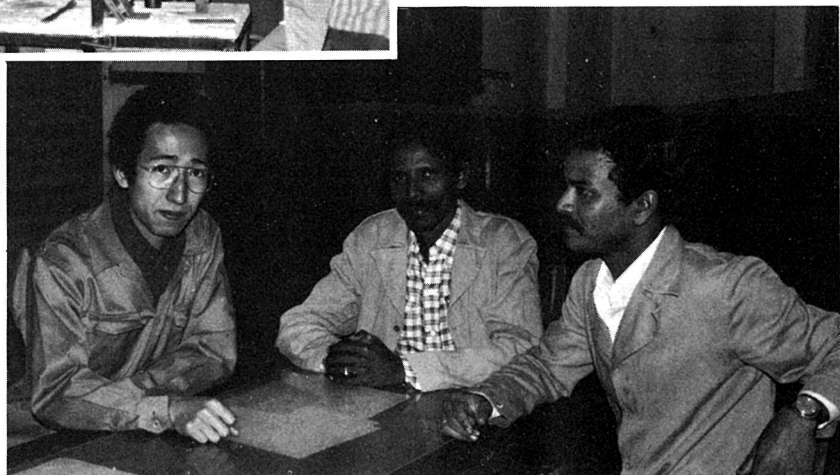
は、八月十日に成田空港に着いた。都合十日間の旅であったが、その間に大変お世話になった華

中工学院の関係者の方々全員に心よりお礼を申し上げたいと思います。

（教養科教授）



ガス溶接実習中の生徒たち



職業訓練校の同僚と・写真左が小田桐氏

国をつつていくのか、楽しみだ。

◇ ◆ ◇

小田桐久夫氏（おだぎり・ひさお）の横顔

青森県立青森工業高校出身。五十二年四月、機械工学科に入學。在学中は少林寺拳法部に所属、三段。体育会本部事務局長などを務める。溶接研究室で卒業計画を仕上げ、卒業後、浦和の職業訓練校へ入学。この頃からすでに青年海外協力隊をめざし勉強する。晴れて合格し、五十七年十月バン格拉デシュに渡る。

た。生徒たちが、学校の制度を改革してくれ、とストライキを始めてしまった。ストライキは一九八四年四月から十二月まで延々と続き、約八カ月間、学校閉鎖が行われた。

独立して、まだ十三年目のこの国。いま、国づくりの最中。私の育てた生徒たちが、どんな

西ドイツ留学記

高橋 篤夫

筆者は一九八三年十一月から一九八四年十月までの約一年間、西ドイツに滞在し、ブラウンシュバイク工業総合大学（Lechnische Universität Braunschweig）電気工学科リンドマイヤー教授の指導のもとで大電流アーク放電現象の研究に従事した。

十一月七日、スカンジナビア航空SK980便で成田を立ち、途中アンカラで五時間の遅延のため、結局予定時刻より五時間以上遅れて八日夕刻ハノーバー空港（ブラウンシュバイクから約六十km）にたどり着いた。四十kg近い荷物がかえ、最初から先行き不安を感じさせられたが、幸いにして研究室のクレーン助手とヴィンスキー氏とが待っていてくれ、大いに助かった。このようにドイツ人はとても親切で、到着後の住民登録アパート探し、電話申し込みにも同行してくれ、ドイツ語に自信のなかった筆者にとっては大変有難かつた。ブラウンシュバイクで約二週間を過ごした後、ドイツ語勉強のためドイツ南部のシュベールビッシュハルに向かった。

大学と研究室

大学は一九四五年にその基礎がおかれたドイツ最古の工業大学で、理化学の数学、物理、化学、工学系の機械、電気、建築、土木測量、文科系の哲学、社会科学、教育と計九つの学科（Fachbereich）から成る。筆者は電気エネルギー設備研究室（Institut für Elektrische Energieanlagen）で「二重コンタクトの再点弧電圧」に関する研究に従事した。日常接したのはミットアルバイターといわれる研究スタッフである。彼等は学部卒業後、博士の学位を取得するまでの四、五年間、有給で研究に従事する。（ドイツには大学院の制度はない。）学部学生は卒業論文（ミットアルバイターの指導で三カ月間実験を行なう）、ゼミナール以外は研究室とは無関係に勉学を続けるので、筆者と接する機会が少なかった。

西ドイツの学生生活

西ドイツの教育制度は複雑で、日本のような単線型ではない。それは是非ともかく、大学卒の「エリート」になるか否かを日本小学校の四年生位の時点で決定し、進路に応じた中等教育を受ける。高等教育機関たる大学も総合大学、専門単科大学、総合専門大学など多種多様で、その修業年限も一定でない。工科系の大学では卒業（ディプロム）の学位取得、までに六年はかかるので、ドイツ人は言わねばならない。ドイツ人は工学修士の学位はない。日本の大学と異なり、標準のカリキュラムにそって単位を取得していけば「自然に」卒業できる訳ではなく、自主的判斷で講義、演習などを取捨選択する必要がある。一般に入学よりも卒業が難しく、一九六六年の資料によると七年間在学後の卒業率（ドイツ全体）は約六割にすぎない。卒業も所属学科所定の最終試験終了を意味するだけで、全学部全学科共通の統一的概念ではなく、従って卒業式もない。また求職活動もほとんどの場合、卒業決定後に行なわれるため、卒業即

西ドイツの生活環境、印象

研究室は朝七時半、授業も七時四十分頃から始まる。ドイツ人は朝の早いのは全く苦にならないようだ。冬には真暗なうちに出かけることになる。

ゲート
インスティテュート
でのドイツ語コース
十一月下旬から約一カ月ドイツ語コースを受講した。後から聞くと日常会話のためには六カ月、政治・経済など複雑な内容への抵抗が減る程度である。ブラウンシュバイクに戻ってからラジオ・テレビを聞き、会話

二名という構成であった。従来から一貫して断続等に関連するようになったのは三月・四月頃である。その後は知っている単語が少ないことが障害となった。単語集を勉強してもなかなか記憶できず、一つの限界を自覚させられた。ほぼ一年かかって、生活に必要な最低限度のドイツ語ができるようになったという程度である。ただし、簡単な内容ならばドイツ語が自然に口に出る一方、英語を話す時にドイツ語的になってしまうのでいささか困っている。



リンドマイヤー教授と筆者（左）（教授の研究室で）

筆者は五時半頃起床し、朝食をとり、七時半にはアパートを出る。徒歩十五分位、八時には研究室に入る。研究室の終業時刻は公式には午後四時半だが、四時をすぎるとミットアルバイターは次々と帰り始める。筆者は四時すぎまで実験を行った後に、大学のメディアオテック（L教室）でドイツ語のテープを学習し、六時ごろ大学を出る。夕食は概してまずいのでアパートに戻り、冷凍食品を温めるなどして夕食をとる。これが平日の生活であった。

ドイツ人が帰宅してから何をするか、よくはわからないがほぼ家庭サービスにつとめるようだ。毎日帰宅が遅く、休日にしか子供の顔をみないような生活は通用しない。日本人と結婚した女性が日本の生活に我慢できず、離婚した例も聞いた。金曜日は既に「土曜化」しつつあり、研究室も三時すぎに終わる。会社などでも午後になるべく早く帰る。別荘に保養するものもある。別に歴史的建造物に限らず、一般住宅でも、例えば外観は普通で、内部は現代的にする改修がよく行なわれる。古いものを大事にすると同時に、効率のみに拘泥しない点が日本人の価値観と大いに異なる。例えば一般住宅ではほとんど昼光灯を使わないが、その理由はその光がゲミューリッヒ（快適）でないことだ。今日の日本は西ドイツ同様、あるいはそれ以上の経済的繁栄を誇っているが、我々は経済効率のみを優先させ、衣・食など残らないものに金を使いすぎ、社会的ストックの蓄積を怠っているのではないだろうか。

いろいろな会合も金、土曜日の夜に行なわれる。結婚披露宴、博士学位取得祝賀会、教授やミットアルバイターの自宅への招待等もほとんど週末である。結婚披露宴などは夕方七時半から八時頃から、始まりはつきりしないままビールを飲み出し、十二時になっても終わらない。自動車を持たなかった誰かが帰るのを待つと結局夜半過ぎまで帰れない。年寄りも十二時頃までおり、体力の差を感じる。時間の長い割には飲むビールの量は少なく、長話に興じている。概して酔うほどは飲まず、日本人は飲み過ぎかもしれない。そんな会合でも食物は全く質素で、パン、ソーセージ、チーズ、せいぜいスモークサーモン程度である。ドイツ人は衣・食ではなく、住居に金をかけ、古い建物も非常によく保存する。百年以上たつと維持費が高くなるようだが、保存のための補助もあるという。別に歴史的建造物に限らず、一般住宅でも、例えば外観は普通で、内部は現代的にする改修がよく行なわれる。古いものを大事にすると同時に、効率のみに拘泥しない点が日本人の価値観と大いに異なる。例えば一般住宅ではほとんど昼光灯を使わないが、その理由はその光がゲミューリッヒ（快適）でないことだ。今日の日本は西ドイツ同様、あるいはそれ以上の経済的繁栄を誇っているが、我々は経済効率のみを優先させ、衣・食など残らないものに金を使いすぎ、社会的ストックの蓄積を怠っているのではないだろうか。

一九八四年十月二十二日から同月二十六日まで、西ドイツのベルリンで開かれた国際標準化機構会議・フレキシブル磁気メディア分科会（ISO TCI 九七 SC1-1）に、情報技術センター長の石井治教授が日本代表として出席した。この分野は、コンピュータ用磁気テープ、カセット、カー



日本代表として出席した石井教授

石井教授が日本代表に国際標準化機構会議に出席

59年度
学外研修等一覧
「EUDP研究報告会および風力エネルギー・シンポジウム打ち合わせ等のため」（西ドイツ、オーストリア、オランダ）
町山 忠弘教授
「IMCSDにおける論文発表およびイリノイ大学、コンピュータ・モニター関係企業を訪問」（アメリカ）
高橋 琢二教授
「プラズマ物理国際会議において論文発表」（スイス、オーストリア）
塚本 功講師
「国際地理学会、日独地理学会国際シンポジウムにおける発表討論、工業地域現地討論」（ヨーロッパ十三カ国）
竹内 淳彦教授
「第二十九回国際ガスタービン会議出席およびドイツのガスタービンメーカー視察」（オランダ、西ドイツ）松本 正勝教授
「国際写真測量学会第十五回リオデジャネイロ会議に参加」（ブラジル）西尾 元充教授
「国際工作機械展覧会および欧州工作機械メーカー訪問」（イギリス、フランス、スイス）
田部井英世教授
「華中工學院との学術協定にもとづく、訪中レポーター部引率」（中国）小林勉教授・中島克典助手・市川益徳教授課長
「第七回ISCSC調査団に参加国際会議出席ならびに工業用タービンルームの動向調査」（フランス）
榎本 武一助教授
「イギリス工業技術教育史、執筆資料収集およびオランダ語低地ドイツ語言語採集」（イギリス、オランダ、西ドイツ）
鈴木 寛次助教授
「学位論文取得のための渡米およびセネカレッジ、トロント大学等の調査に同行」（カナダ、アメリカ）
田中 知英講師
「カナダ短期留学の引率、指導およびセネカレッジ、ケベック大学の調査」（カナダ、アメリカ）
伊藤 隆助教授
「カナダ短期留学の指導およびセネカレッジ、ケベック大学の調査」（カナダ、アメリカ）
大川 陽康教授
「ソウル国立大学工学部における特別講演」（韓国）
豊田 昇教授
「学生ヨーロッパ研修旅行の引率」（ヨーロッパ各地）
桑原文夫助教授・加藤実施設長
「ISO国際会議出席および関連活動調査」（西ドイツ）
石井 治教授
「EURDプラントエンジニアリング・システムダイナミックス部門会議に出席」（フランス、西ドイツ）
町山 忠弘教授
「ネパール王国古王宮の保存と対策に関する現地調査」（ネパール）
波多野純講師・大萱昭芳助教授・黒津高行教授技術員
「華中工學院との学術協定にもとづく研究指導および講演等」（中国）
長谷川洗教授・廣瀬治男教授・鈴木昭助教授・丹羽次郎講師
「第五回リモートセンシングアジア会議出席」（ネパール）
西尾 元充教授
「ORCシステムシンポジウムセミナーに出席」（西ドイツ、オランダ）
町山 忠弘教授
「大電流アーク放電現象の研究のため、西ドイツ、ブラウンシュバイク大学へ長期研修」（西ドイツ）
高橋 篤夫助教授
「中華民国・中原大学の客員教授として招へい」（中国）
齊藤 亨教授